

放牧繁殖牛への焼酎蒸留粕利用成果と課題

著者	片平 清美
雑誌名	鹿児島大学農学部農場技術調査報告書
巻	10
ページ	20-21
URL	http://hdl.handle.net/10232/2765

放牧繁殖牛への焼酎蒸留粕利用成果と課題

片 平 清 美

(農学部附属農場)

目 的

第6回の技術報告で焼酎蒸留粕を飼料資源としてみると栄養価が高く(表1)、放牧繁殖牛に給与することにより粗飼料節減にもなる。又焼酎蒸留粕給与により繁殖牛は過肥になる傾向が見られた。しかし、授精には障害は認められず、むしろ子牛の生時体重は大きくなる傾向があると報告した。

その後も入来牧場では焼酎蒸留粕の放牧繁殖牛への給与を継続して来ている。本調査では5年間(平成8年～平成12年)の焼酎蒸留粕の利用成果と課題について報告する。

材料と方法

焼酎蒸留粕給与期間は平成8年1月～平成12年12月である。給与場所は3ヶ所で自然流下式の簡易飼槽(U字型側溝)を用い給与した。頭数は1ヶ所当たり30頭～50頭の範囲で年間120頭～140頭に給与した。各年度とも9月上旬～12月中旬までは甘藷蒸留粕であり、12月中旬から4月下旬までは麦蒸留粕を使用した。

結果と考察

甘藷蒸留粕は麦蒸留粕に比べて嗜好性が高く、吸引採食量は各年度とも10月、11月が最も高くなった。各年度とも甘藷蒸留粕を充分吸引採食させることにより、野草地放牧が延長でき粗飼料(ロールサイレージ)給与は殆ど必要なかった。一方麦蒸留粕の吸引採食量は各年度とも低くなったが、粗飼料(ロールサイレージ)給与量は半減した(図4)。どの蒸留粕でも飼養コスト低減ができ省力管理が出来た。しかし、蒸留粕給与により繁殖牛が過肥に成る傾向が見られたが、繁殖牛の授精に障害は認められなかった。

問題点としては、各年度とも一ヶ所で給与するため泥濘がひどく、今後の改善策が必要である。

以上のことから焼酎蒸留粕利用は、放牧繁殖牛管理においてコスト低減ができることが明らかになった。今後は、焼酎蒸留粕を有効利用することで育成牛及び肥育豚にも活用出来ないか検討を進めたい。

第1表 焼酎蒸留粕の栄養価 (単位：%)

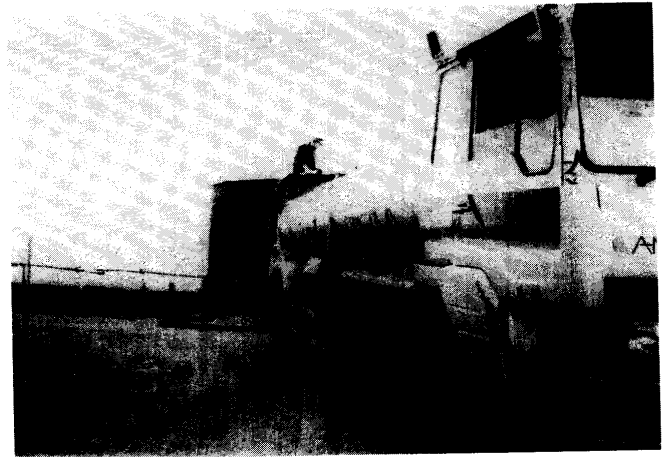
飼料名	水分	DM	DCP	TDN
甘しよ 焼酎蒸留粕	95.8	4.2	0.5 (12.6)	2.4 (57.0)
麦 焼酎蒸留粕	92.7	7.3	1.5 (20.4)	4.7 (64.4)
イタリアン サイレージ	70.8	29.2	2.6 (8.9)	17.7 (60.6)

() 内は DM 中%

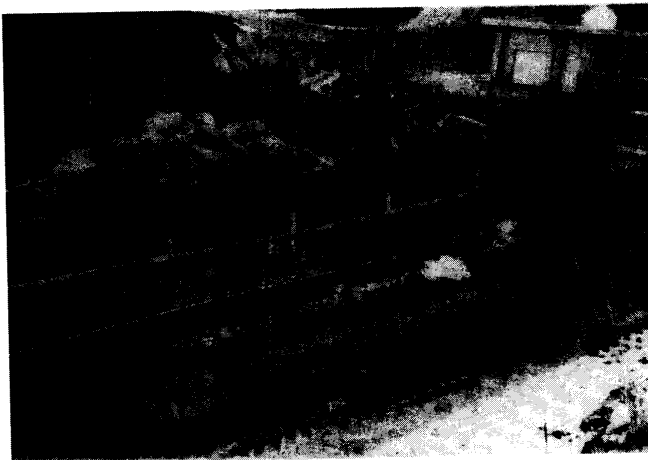
DM 乾物

DCP 可消化粗蛋白質

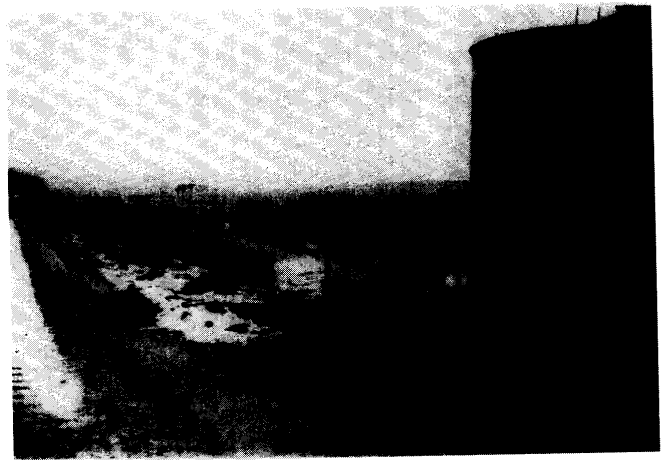
TDN 可消化養分総量



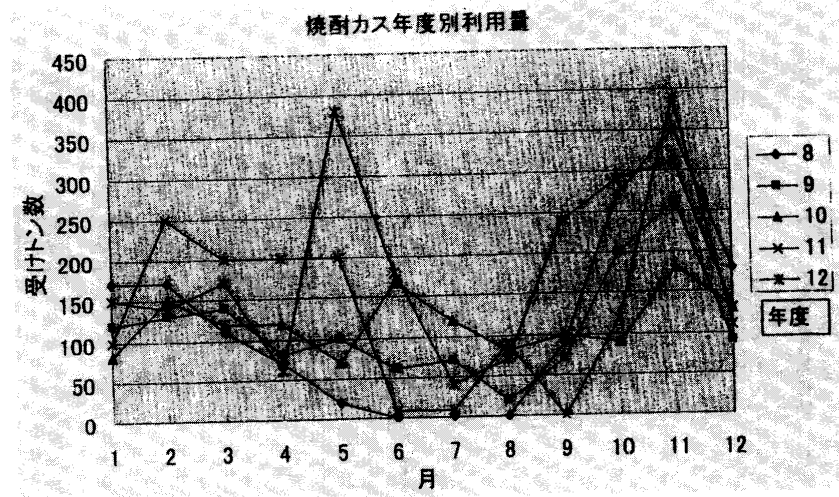
第1図 焼酎蒸留粕搬入状況



第2図 焼酎蒸留粕吸飲採食状況



第3図 焼酎蒸留粕吸飲採食状況



第4図 焼酎蒸留粕年度別、月別利用量